

生理学の立場からみた英語音 /r/ の調音法

The Articulation of English Pronunciation /r/ from a Physiological View

佐藤 志津子

SATO, Shizuko

日本語を母国語とする人が、英語音 /r/ を発音する場合の問題点と調音法。調音器官からのアプローチ。

目次

はじめに

- ・発声のメカニズム
- ・認知のメカニズム
- ・調音のための身体器官
 1. 肺
 2. 咽頭
 3. 声帯
 4. 口腔
 - (1) 歯
 - (2) 口蓋
 - (3) 舌
 - (4) 唇
 - (5) 下顎
- ・ /r/ の調音法

(1) /r/ の発音法 その1

(2) /r/ の発音法 その2

(3) /r/ の発音法 その3

・ /r/ 音の特性

(1) r-linking

(2) r の異化

(3) r の脱落

(4) 隠された r

・ Native Japanese の英語音 /r/

(1) 調音器官の使用法

(3) 呼気量の関係

(3) 英語音 /r/ と /r/ の混同

・ まとめ

はじめに

わが国では、英語を日本語の中に入れて話す人は以前に較べかなり多くなっており、普通の会話の中に英語を取り込んでいる。しかし、「発音」の観点からすると適切に調音され

ているケースはそれほど多くないのが現状である。中学校、高等学校で英語を学び、その後大学へ進んだ人はさらに長い期間、英語を勉強している。それにも拘らず、実際の「発音」となると調音法を理解している人はあまり多くないし、注意を向けている人もそれほど多

キーワード：発音学、調音器官、割り込みの R
Key words : practical phonetics, articulator, intrusive /r/

くない。過去の英語教育では、英語の原文を忠実に日本語に訳し、その原文の意味を理解しようとすることに重点がおかれてきた。そのため、文法事項、書かれた文章の読解に力を入れ、発音は「カタカナ」でも「通じれば良い」とされてきた。しかし、近年、とみに世の中がグローバル化し、インターネットの発達で英語が不可欠となり、実際に使える英語つまりcommunicationで通じる英語が求められるようになってきた。それにともなって、英語そのものも「書かれた英語」ではなく、実際に使える「音としての英語」に力点が置かれるようになってきている。日本では、長期に渡って英語を勉強しているにもかかわらず、各種英語検定試験の合格率が世界各国と較べてかなり低い。その一因は、実際に使われる英語の音「発音」に力点を付けていなかったことにある。本来の語学習得に必要な四技能 listening ability, speaking ability, reading ability, writing abilityのうち、過去には、reading ability, writing abilityに重点が置かれていた。その後、listening abilityとspeaking abilityの必要性が求められ、oral communicationという科目が重視されるようになった。しかし、英語の「音」に対するケアが少ないため、listening, speakingの時間を多くしても、期待通りの良い結果がでていない。そこで、この小論では、英語音のなかで、日本語と類似していると考えられている英語音 /r/ に注目して、考察してみることにした。

日本人同士の会話で、「ライトな感覚」と「ライト、レフト」と言う場合、light（軽い）とright（右）を区別することなく、同じ調音法で発音している。また、「我々のリーダー」と「この本のリーダー」と言う場合、やはり

leader（指導者）とreader（読者）は同じ発音である。日本人同士が「外来語」のようにして英語を「カタカナ」で発音する場合には、「英語らしい発音」を求められていない。しかし、英語の native speaker との会話において「カタカナ発音」でcommunicationをとることはトラブルが生じやすい。

/l/ と /r/ の調音動作は本来異なるはずだが、同一に発音している。日本語として発音する場合は、/l/ と /r/ を同一発音しても通じるが、英語として発音する場合には、英語の native speaker には理解しにくい。

では何故、このような問題が生じるのであろうか。今回は焦点を絞るために/l/ /r/ の両方を扱うのではなく、/r/ のみで考察してみたい。

日本語を母国語とする人が、第二言語として英語を習得する際、英語音/r/の発音を正確に調音することは容易であると認識されている。日本語には「ラ行」の音があるからである。しかし、実際に/r/を「英語音」として適切に調音するケースは多くない。また、/r/ と /l/ とを混同する原因は様々であると考えられるが、ここでは、主に「身体器官」を中心に英語音 /r/ を考察してみたい。

・発声のメカニズム

人間は動物と異なり、言葉を使って話をするができる。動物は単一音を発するか、唸るか吠えるだけである。ところが、人間は様々な調音法を駆使して「言語」を発することができる。細かい身体的器官に関しては後の章で述べることにして、ここでは「発声」のメカニズムを述べる。

人間は発声する必要性にせまられると、脳から迷走神経を通じて咽頭筋に命令を出す。

命令を受けた咽頭筋が伸び、声帯は収縮して声門を閉じて気管内の内圧が高まる。一旦吸った空気が肺から気道まで来ていて、その呼気(肺から外に出る空気を「呼気」と呼ぶ。)が一気に声門から外に出る。このように何度も声門が開閉を繰り返し、声帯を振動させて「音」が出る。声帯を振動させただけでは単なる「音」に過ぎないが、呼気が通過する過程で調音器官を使って多種多様な「発音」にしていく。咽頭を通過する音が周期的に自由に口から出ると「母音」になり、振動する通路が全面的に閉鎖され、または部分的に閉鎖されると「子音」になる。

日本語は一音一音が独立していて、全て母音で終わっているため聞こえ度が高い。一音が子音で終わらないので閉鎖するケースが、英語の発音に較べて少ない。従って日本語を発音する場合、咽頭から出る「声」に対して複雑な調音動作をする必要性が低い。口の開き方も小さく、呼気量も少なく聞き手に伝えることができる。それに対し、英語は一音が母音で終わる場合と子音で終わる場合がある。日本語のように、一音が「子音+母音」のセットではなく、母音、子音が別々に一音として独立している。一音が母音で終わる場合には、日本語とほぼ同様に呼気量は少なくても聞き手に伝わりやすい。ところが、一音が子音で終わる場合には呼気が調音器官のどこかで閉鎖されるので、母音の発音より多量の呼気を必要とする。子音を、母音と同じ聞こえ度にするためには、閉鎖される量に反比例して呼気量を多くする必要がある。特に無声音の場合、空気のみで発音されるので、呼気量は有声音より数倍多くなる。日本語を母国語とする人が英語の発音をする場合、英語音の子音の後に不要な母音をつける傾向が多

い理由は、呼気量が少ないままで発音し、聞こえ度が少ないことを不安に感じて無意識に子音の後に母音を加えてしまうからだと考えられる。

・認知のメカニズム

発音された音を最初に認知する所は、耳である。耳は外耳、中耳、内耳と三構造から成り、一番外側に見えるのが耳介である。発音された音を拾い集める役割を持ち、平らでなく凹凸になっているのは、微妙な音変化を聞き分けるためである。この耳介で拾った音は外耳を通過して中耳にある鼓膜に届く。音を振動として受けた鼓膜は、その振動をツチ骨からキヌタ骨、アブミ骨へ、そして最後に蝸牛まで伝える。蝸牛は渦巻き状になっており、伝ってきた音を電気信号に変えて大脳へと伝える。このようにしてわれわれは耳介から入ってきた音を実際の「音」として認知できるのである。

身体的見地からはこのシステムでのみ、音を認知することが可能であるが、人が「発音」を認知する場合には、この身体的見地からのみではなく、他の要因も合わせて総合的に認知していることになる。大きく分類すると 1．視覚 2．周囲の環境 3．感情 の三つの理由が考えられる。

1．視覚

人は目から入ってきた情報を、耳から入ってきた情報と重ね合わせて「発音」を認知している。日本語を母国語とする人が、英語を第二言語として学習している場合、耳からのみでは「発音」を聞き取れないが、書かれている文字を見ると理解できるケースが多い。発音を明確に認知できない部分を、視覚を通じて補っているケースである。日本語を母国

語とする人は、子音の語尾を聞き取ることに慣れていないため、視覚からの情報に依存する傾向が強い。ここで問題と思われるのは、listening test 時に、選択肢の英文を与え、内容理解に対して視覚からの情報を補っていることである。本来は英文を聞いて、答えの選択肢も英語を聞くのみにすることがよい方法だと思われる。

2. 周囲の環境

日本語を母国語として学んでいる人が、いつもは正確にある特定の英語音を「発音」できなくても、周囲にいる人、または人々がその発音を繰り返し出している中にある場合、同調して「発音」できるケースが多々ある。それは、耳による認知に加えて、周囲から聞こえてくる同音の反復刺激によって、無意識にその音を模倣するという調音動作を行う結果「発音」できてくるものである。周囲の環境が、音の認識に影響を与えることは、英語圏に留学した人が英語を習得するスピードが早いことからわかるであろう。英語圏で生活する場合、必要に迫られて、つまり、周囲の環境によって発音の認識度を高めている。

3. 感情

音を認知する場合、耳からだけでなく「人間の感情」によってもその認知度が変化する場面がある。発音する人の感情が何らかの原因で高まっている時、その人の音のトーンは普通より高くなるか、または反対に普通より低くなる。さらに、感情が高まっている場合には、「強さ」の点でも、通常より一段と強まるか、反対に一段と低くなる。その感情の変化によって、耳からの認知だけでなく、認知度も異なってくるのである。

・ 調音のための身体器官

1. 肺

発音する時、空気を一旦肺に溜め、そこから出す空気を使用する。外から吸い込む空気を「吸気」、肺から体外へ出す空気を「呼気」といい、調音にはこの「呼気」を使用する。肺は気管から入ってきた空気の中の酸素と、静脈血が全身から回収してきた二酸化炭素を交換し血液を新鮮にする。その時発生した二酸化炭素を気管支、気管、喉頭、咽頭を通過して口、鼻から呼気として体外へ排泄している。この呼気に様々な調音動作を加えることで「音」を作成している。

肺は左右一対あり、右肺は上葉、中葉、下葉の3つの袋から成り、左肺は上葉、下葉の2つの袋からできている。左側には心臓という臓器があるため、左肺は右肺より小さい。肺の内部は空気の通り道である気管支があり、さらに肺胞という小さい袋が多数あり、この肺胞で「酸素が多い吸気」を「酸素が少ない呼気」へとガス交換している。吸気には酸素が21パーセント、二酸化炭素は0.4パーセント含まれ、呼気には酸素が17パーセント、二酸化炭素は4.4パーセント含まれている。呼気は二酸化炭素のみでなく、吸気ほど多くはないが酸素も含まれている。日本語を母国語としている人が日本語を発音する時、それ程意識して呼気を出してはいない。しかし、母音で終わる日本語と同様に英語音、特に無声音を発音しようとする場合には、呼気量を多くしないと聞き手には伝わりにくい。呼気量を通常より多くしないと、母音が大きく、子音が小さい発音になってしまう。この不均衡をなくすためには、母音の調音時には呼気量を少なめにし、子音の調音時には呼気量を多

くすることで、英語の発音にバランスを与えられる。

2. 咽頭

肺から出た呼気は、気管を通過して咽頭へ達する。咽頭は気管の上部にあり、空気の気流を調節する場所で、軟骨で囲まれた筒状の気管である。内部は襞状になっており、上部に仮声帯、下部に声帯、左右の声帯の間に声門がある。調音動作には、この声帯と声門が重要な働きをする。俗に「のどぼとけ」と言われるのは甲状破裂筋のことで、男性はこの甲状破裂筋の上部が、突出している。甲状破裂筋が女性や子供より長いので、声の周波数が低い。

3. 声帯

声帯は調音する時、重要な働きをする器官で、音源となっている。調音時に働くのは、仮声帯でなく、その下部にある声帯である。左右にある声帯間の裂け目は声門であるが、その開閉の度合いを決定するのは披裂軟骨である。安静状態では、左右の声帯が三角形に、最大限開いており、呼吸時にはこれより少し狭まる。これに対し、披裂軟骨を閉じて声帯を接近させ、声門下を緊張させると内圧が高まる。そこを肺から出ようとする呼気が通過する際、「声」となる。無声音は、声門が開いた状態なので、空気だけの「音」となる。有声音は、声門が閉じた状態を呼気が通過するため周期的に振動して「声」となる。

ここで扱う英語音 /r/ は、英語音声学上、有声音でも、子音でもなく、「半母音」として分類されている。

4. 口腔

(1) 歯

歯の役割は、食物の咀嚼という役割がある。門歯、犬歯、前臼歯、後臼歯という順に前中心から並んでいるが、音声学では、門歯が重要な役割を担っている。さらに、この門歯は門歯裏の付け根にあたる歯茎と共に調音動作時に使用される。英語音には、歯と歯の間から呼気を通過させて調音する音もある。また、英語音 /r/ の調音時に、後臼歯の噛む面に舌の付け根の両サイドを固定して発音するというやり方があり、後臼歯にも発音の大切な役割がある。

(2) 口蓋

口腔内の上部（天井部）で、歯茎の付け根から後方へ続く部分を硬口蓋、そのさらに奥を軟口蓋という。呼気が声帯を通過して、振動がそのまま声になるのではなく、口と鼻に伝わり、そこで共鳴して声になる。従って、口蓋も共鳴装置の一部と考えてよい。この軟口蓋の付け根に、軟らかく垂れ下がった肉片である口蓋垂があり、俗に「のどちんこ」と呼ばれている。人間は、気管の後ろに食道が並列しているため、呼吸と発声のためには食道の入り口を塞ぐ必要がある。この塞ぐ役割をしているのが口蓋垂で、気道を確保するため垂れ下がり、喉頭蓋が上がり、舌にくっついて気道と鼻を空気が通過しやすくしている。

英語音 /r/ は、口蓋内部で呼気がこもるので、英語を第二外国語としている日本人には、正確に認識し調音することは容易ではない場合が多い。前述したように、日本語は一音の最後が母音で終わるので口中にこもらず、明確な音である。それに対し、英語音 /r/ はこもる音で、日本語の言語習慣にはあまりない。

(3) 舌

舌骨に支えられている舌は、球形の筋肉組織からできており、柔軟性があり、複雑な動きができる。舌の最先端部である舌先は、繊細な動きができ、英語の発音上重要な働きをする。特に英語音 /r/ は、この舌先を口中で上から喉奥へ向けるという調音動作時に使用される。舌先の少し後方を舌端、さらにその後方に前舌面、後舌面がある。前舌面と後舌面の境界部が中舌面という。舌の後方表面を舌背、また、舌の最後部の付け根部分を舌根と呼ぶ。日本語の調音には、英語ほど舌の繊細な動きを必要とされない。英語音の調音には、この舌の動かし方や固定する位置によって「音」が決定される。

(5) 唇

唇は調音器官としては、口腔と声道の末端にあり、唯一体外から見える部分である。英語音を学ぶ時、「native speaker の唇を見て、同じように動かしなさい。」と言われることが多い。しかし、調音は唇のみで行われているわけではなく、他の調音器官と併用して行われている。従って、唇の動きを模倣するだけでは、正確な調音理解は難しい。唇は口輪筋が働くことによって、縦横の開閉が行われたり、丸めたり萎めたりができ、この動きが発音に影響する。日本人が日本語を発音する場合、英語に較べて唇の動きが大きい。

英語の native speaker は、日本人に較べて唇の動きが大きく複雑であるため、外見上、「愛想が良い」と思われている傾向がある。それは、日本語に較べて、口輪筋を活発に使用しなければならないため顔全体が動くからである。日本人が「能面」のように表情に乏しいと言われるのは、この唇の動きが少なく

も発音できることに起因していると考えられる。

(5) 下顎

下顎は、顔のなかで唯一の可動骨で、人間の意志によって動かすことができる。下顎についている筋肉が弛緩していれば口は下がる。頬から下がっている咬筋に強い力がかかると下顎が上がり口は閉じる。下顎は声道の形状に関与するという、調音上重要な働きをする。日本語を母国語とする人が大きな口を開けて英語音を発音しなければならない場合、自分自身では大きく開けているつもりでも、ほとんどの人が十分な開きかたをしていない。その場合、下顎の下げ方が少なすぎるので、口腔内に十分な空間が確保されず舌の動きがスムーズにいかないのである。母音で終わる日本語の発音には、この下顎をおおきく下げなくても聞こえ度は確保されるが、英語音は空気のみのも音もあるので、下顎を大きく下げることで舌の動きの正確さを確保して呼気の摩擦を強くしなければ、聞こえ度は小さく伝わりにくい。

・ /r/ の調音法

(1) /r/ の発音法 その1

/r/ の調音法には数種類の方法があり、それらには少しずつ違いがある。しかし、ここでは一応、スタンダードな方法をもちいることにする。松井千枝氏の『英語音声学』によれば、「/a/音を出しながら、舌の先端を後部歯茎に向かって持ち上げて、どこにもつせず、口の奥の方へそらせば、/r/音が生じる。舌の先端を少しでも巻くと、アメリカ英語らしくなる。唇をやや突き出すように丸め気味にして発音する。」¹⁾とある。/r/音は、分類からす

ると「有声・後部歯茎・半母音」voiced postalveolar semivowel である。/a/ 音は有声で声帯を振動させる。「……舌は後部歯茎に向かって持ち上げる……」とあるが、その際、「……舌の付け根部分を奥歯の先端面に着けて丸める……」²⁾とする人もいる。しかし、奥歯の先端面に舌根を着けると舌の動きが自由にできなくなる、また、どこにも舌根を固定させないと逆に舌を丸める際に不安定である。舌根の両サイドを奥歯の付け根の歯茎部分に固定させると安定して丸めることができる。「……舌の先端を巻く……」という調音動作は日本語には無いので、日本語を母国語とする人がこの調音動作をしようとすると、初めは戸惑う場合が多い。日本語の調音動作には、舌を口腔内で裏面を出して丸めるという方法が無いのでさらに戸惑う。舌を丸めることにより/r/ 音は口中に呼気の一部が籠もる。日本語にはこもる音で終わるケースがほとんど無いので、呼気を全て出し切ること慣れてる。そのため、/r/ 音の後に母音を付けたし、呼気を全て出し切る調音動作をしてしまうことが多くなるのである。

(2) /r/ の発音法 その2

語頭、語間の/r/ は前述の発音法であるが、語末の/r/ の発音は、スペルに -r, -re, -er, -or があっても発音しない。英語の辞書の発音記号にはəが入っているので /r/ を調音するケースが多い。しかし実際には、この発音記号のəは弱いV/r/ 音で、調音法が上記とは異なる。この強勢の無い場合の/r/ 音の調音法は、舌を口腔奥へ舌先を向けるのではなく、舌を丸めず、平らにしたまま舌中心部に溝をつくるつもりで舌の両サイドを少し持ち上げる。この調音法は前述の調音法とほぼ同じである。

(3) /r/ の発音法 その3

閉鎖音/r/ の調音時に、/r/ に変化させる場合がある。例えばwater の発音で、正規には [wɔ:tər] である。/t/ の調音は舌先を上前歯中心の裏側歯茎につけ、勢いよく離すのが普通であるが、舌先を歯茎につけず、そのまま舌先を口腔から口先へもどせば/r/ の調音法と同じになる。従って、[wɔ:rə] となり、「ウラーター」とは聞こえず「ウラーラ」、さらに調音速度が速くなり舌を丸める調音動作を省くため、後続の「オ」の母音も唇をまるめる必要がないので口を開けたまま「ア」という母音にかわり、全体の調音が「ワラ」と聞こえる。この/r/ 音を/r/ 音に変化させて調音するケースはしばしば会話の中で起こる。その原因は、調音動作を省いて速度を速め、多くの伝達をしようという表れと考えられる。

・ /r/ 音の特性

(1) r-linking

r-linking は「つなぎの r」とも言われ、語末の r と子音の前では発音されない。しかし接尾語 -er, -or, -est, -ing, -y がつくと/r/ が復活して発音されるようになる。例えば、dear [diə] に -er がついて dearer になると、本来は語尾の r は発音されないが、-er が加えられたことにより、r が復活して [diərə] となる。「ディア」が「ディアラ」となり/r/ 音が現れる。

また、母音で始まる接尾語だけでなく、二語が密接な関係にあり、後続後が母音で始まる場合にも r-linking は起こる。例えば、far away の発音の場合、一語ずつでは [fa:] [əweɪ] となるが、通常は二語を離して別々に発音せず、一語のように [farəweɪ] となる。「ファー」「アウェイ」ではなく「ファラウェイ」となり、

/r/音が現れる。here and there も同様に、r-linking する一般的な実例であり、一語ずつ発音するケースは稀で、[hɪə] [ən] [ðeə] ではなく、[hɪərənðeə] という発音になる。「ヒア」「エン」「ゼア」ではなく「ヒアランゼア」となり、「つなぎの r」が現れてくる。

(2) r の異化 r-dissimilation)

遠隔異化の一種として離れた音同士が影響しあうもので、/r/ の繰り返しを避けるためのものである。例えば、explorer [ɪksplɔːrə] の場合、r が一語中に二箇所あるので、調音の際、後者の r から /r/ 音声を無くす。/ɔː/ と /rə/ では同じ /r/ の一方が無くなり、[ɪksplɔː] となり、「イクスプロアラー」ではなく /r/ 音を無くして「イクスプロララー」と発音される。

また、library ['laɪbrəri] の場合、一語中に r が二箇所あるが、両方とも弱音節なので、先行の r を脱落させる。実際には ['laɪbrəri] となる。「ライブラリ」ではなく「ライパリ」に近い発音となる。

(3) r の脱落 縮約

r のスペルがあるにもかかわらず、何らかの関係でそれを取って発音しない現象を「r の脱落」といい、ここではその一種と考えられている「r の縮約」を取り上げる。例えば、we are は特別な場合を除き /wɪ:/ /ə/ と別々に発音されることは稀で、普通は二語を連結させて we're /wɪə/ となる。「ウィー」「アー」ではなく「ウィアー」に近い発音となる。are は /ɑ:/ という母音の後に -re があるので、通常は /ə/ と発音される。しかし、短縮形になった場合には r が変化するのではなく先行の母音に変化する。前述までの全てのケースでは、r 自体の変化であるが、この「縮約」では

r 自体の変化ではなく、r の先行母音に変化を与えているのである。

(4) 隠された r

英語には書かれていない文字が、実際の発音上に現れてくる現象があり、「隠された r」、または「秘密の r」と言われている。例えば、law again /lɔ:/ /əɡen/ を一語ずつ発音すると「ロー」「アゲン」となる。しかし、実際の英語では一語ずつ発音するケースは稀で、二語を連結させて発音する。その発音は /lɔ: rə'gen/ 「ローラゲン」となり、r 音が入ってくる。先行の law の語末に r のスペルは入っていないが、後続の語頭の母音と連結して r の発音が出現したのである。この現象を Standard American English では、スペルに無い音が現れるので “The Secret r” “隠された r」、または「秘密の r」と呼んでいる。また、別の呼び方「割り込みの r」「intrusive r」という人もいる。この現象を「学問的でない」「非標準英語」だとする人もいるが、広く受け入れられ、しかも現実の発音では一般的に使用されている。英語を第二言語としている人には、あまり耳なれない現象であるが、英語の native speaker は、特別に言語を研究している人以外でも、通常の会話で無意識にこの発音をしている。

この「秘密の r」は、二語の連結時に起こり、先行の語末が曖昧母音 /ə/ で終わり、後続の語頭が必ず母音で始まっている場合に起こる。曖昧母音 /ə/ は、a と e の間の曖昧で不明瞭な音なので、特にアメリカでは、近くにくる音によってそれ自体が変化することがある。

では何故、曖昧母音の後続語に母音を連結させると /r/音が発生するのであろうか。/r/

音の調音法は、曖昧母音 /a/ の調音法が舌の力を抜いて下方に位置するため、/r/ の調音動作開始の構えをしていることになる。さらに、/r/音は、後続の母音を伴って舌を開放する。従って、舌の動きが、この「曖昧母音 + /r/」の連結の場合、スムーズで、間に途切れ目無く行われるのである。このため、二語の連結のなかで、この「曖昧母音 + /r/」に限って、スペルには無い /r/音が現れてくるのである。また、この現象の起因を「rの類推」と捉えている人もいるが、実際には、この「rの類推」のみでなく「調音法の類似」も起因の一つと考えられる。

・ Native Japanese の英語音 /r/

(1) 調音器官の使用法

日本語を母国語としている人は、日本語の調音動作が身に付いているため、日本語独特の調音器官の使い方を覚える。この日本人が、第二言語を習得しようとする場合、日本語の調音動作に慣れていないため、英語音を発音する場合、英語の調音動作に切り替えることは容易でない。特に、英語音/r/の場合、日本語に「ラ行」があるため容易に発音できている人が多い。正確な英語音 /r/ の調音法は、日本語の「ラ行」とは異なるのであるが、native Japanese は「ラ行」と同じ調音をするケースが多い。

英語音 /r/ の調音法は、舌を持ち上げさらに舌先を口腔奥へ向けるため口腔内に呼気がこもる。音としては、はっきりとした音ではなく、曖昧な音になる。それに対し、日本語の「ラ行」は、舌先を上口蓋前方へつけ、それから舌先を弾き、その後、母音を付けるために口を大きく開いて調音する。発音の最後には必ず「母音」をつけるため聞こえ度は大

きくなる。

日本語の言語習慣では、一音一音が「ア行」以外、「子音+母音」から成り立っており、一音の最後に必ず母音があるため子音を十分に発音しなくても一音として通用する。この言語習慣を英語にも適用しようとして英語音 /r/ を発音すると、英語音/r/ の調音が正確ではなくなってしまう。

日本語を母国語とする人が英語音/r/を正確に調音するためには、「rの調音法」に次の三点を加えるとスムーズに発音できることがわかる。一点目は、舌先を口腔奥へ向けるために舌をひっくり返す時、舌根の両端を両奥歯の歯茎にしっかり固定する。固定しないと舌を巻きすぎて呼気のコもりが過剰になり、日本語の「ウー」そのものになってしまうからである。二点目は、舌をひっくり返すだけの空間を口腔内に確保するため、下顎を十分下げる。日本人は昔、「大口を開ける」のは下品とされていたので、自分では下げているつもりでも、実際にはあまり下顎を下げないで調音する人が多い。日本語の調音時には、歌ったり、叫んだりする場合以外、あまり「大口を開ける」必要が無いので、下顎の下げ方が小さい傾向にある。三点目は、「唇を丸める」という場合、普通はただ唇を突き出して丸めているだけだが、舌を自由に動かすためには、下顎の真ん中の丸み（梅干状）の両サイドに力を入れると良い。そしてさらに、唇の突き出し方を大袈裟にするのではなく、どちらかというとな顎の丸み（梅干状）の両サイドの方により力を入れ、意識もここに集中すると唇の突き出し方もほどほどになる。

(2) 呼気量との関係

英語音/r/ の調音時に、日本語の「ラ行」の

調音時より呼気量は多い。日本語は一音が必ず「母音」で終わっているのので、呼気量が少なくても聞こえ度の高さは保たれる。しかし、英語音 /r/ は口腔内で呼気がこもるが、その分、日本語より多くの呼気量を必要とする。日本語の言語習慣に慣れている人は、この呼気量を多くする必然性を見落としがちである。日本語を話す人は呼気量を気にせずに発音しているが、第二言語として英語を習得しようとする際には、この呼気量が大いに必要とされていることに注意を向けなければならない。

(3) 英語音 /r/ と /l/ の混同

英語音 /r/ は「有声・後部歯茎・半母音」(voiced postalveolar semivowel) であり、英語音 /l/ は「有声・歯茎・側音」(voiced alveolar lateral) で、この二音は全く異質である。しかし日本語を母国語とする人は /r/ と /l/ を混同して二音を同じ調音動作で発音する人が少なくない。それは、「母国語以外の言語を習得する際、その人の母国語に似せて発音する。」という習性によるものである。例えば、leader と reader は、日本人には両方とも「ラ行」の音として捉えられている。英語音 /r/ と /l/ は、日本語には無い音なので、二音とも日本語に一番近い音「ラ行」へと移行させる。日本語のみの会話中では通用するが、英語の native speaker が聴き取るのは困難である。それは、英語の native speaker 側からすれば、日本語の「ラ行」の音が英語には存在しないからである。

・まとめ

日本語には「べらんめえ口調」が「江戸っ子らしさ」の象徴とされていたり、歌舞伎や落語でもこの「べらんめえ口調」が使用され

ている。必要以上に「巻き舌」で調音されるケースがしばしばある。この「べらんめえ口調」は大袈裟な「巻き舌」を使って発音され、語の強調や印象付けの深さを狙って行われる調音動作である。この「べらんめえ口調」を、さらに大袈裟にするためロシア語の「トリル」を使用していることもある。この日本文化の影響が、英語音 /r/ の調音時にも反映されていると考えられる場面もある。日本語を母国語とする人が、英語音 /r/ を発音する際、必要以上に「巻き舌」になってしまう傾向の一因は、この「べらんめえ口調」が意識的、または、無意識的に体に入っているからではないだろうか。日本語の native speaker が英語音 /r/ の調音を容易だと考え、英語学習の初歩の人が英語で会話する時に不必要な場面でも英語音 /r/ を付け加えてしまうのは、英語音 /r/ が入っていると「英語らしく聞こえる」と誤解しているからである。英語学習の初心者は、英語の native speaker が話しているのを聞いて「ペラペラと速く話すので、全く理解できなかった。」と言うケースが多い。この「ペラペラ」という印象から「巻き舌」を必要以上に使用するとも考えられる。「速すぎて理解できなかった。」というのは、「巻き舌」が原因ではなく、linking という別の原因に起因しているのであるが、これに関しては別の機会に考察してみたい。

英語音 /r/ は、日本語を母国語とする人には、この音が「ラ行」に似ているため、調音時にあまり注意を払わなくても発音できると考えている傾向が強い。しかし、調音器官の動かし方は、前述のように、日本語とは全く異なっているので、十分に「呼気」と「調音器官」の一つ一つを使用する必要がある。

注：

- (1) 松井千枝 著『英語音声学』改訂版（朝日出版、2001）を参照。
- (2) 竹林滋 著『英語音声学』（研究社、1996）を参照。

Sam Chwat, Speak Up! -Learn to Speak Standard American and English -Asian Indian and Middle Eastern Accent Elimination Program (Crown Publishers, 1990)

Sam Chwat, Speak Up!-Learn to Speak Standard American and English -American Regional Accent Elimination Program (Crown Publishers, 1994)

参考文献

- 竹林 滋著『英語音声学』、研究社、1996年。
- 渡辺和幸著『英語のリズム・ハンドブック』、鷹書房、1980年。
- 後藤正次著『英語音声学研究』、大阪教育図書、1991年。
- 竹林滋・斉藤弘子共著『英語音声学入門』、大修館書店、1998年。
- 斉藤純男著『日本音声学入門』、三省堂、1997年。
- 清水克正著『英語音声学』、剗草書房、1995年。
- 酒向誠著『比較音声学試論』、英潮社、1979年。
- 神保格著『国語音声学入門』、刀江書院、1940年。
- 小田幸男・木村和夫共著『英語教育音声学』、京都アポロン社、1984年。
- 松井千枝著『英語音声学』改訂版、朝日出版、2001年。
- 天沼寧・大坪一夫・水谷修共著『日本語音声学』、くろしお出版、1979年。
- 根間弘海著『英語の発音とリズム』、開拓社、1996年。
- 岩本一・Sandra Lanana共著『コミュニケーションのための音声学』、評論社、2001年。
- 下重勝雄著『からだのしくみとメカニズム』、日本文芸社、2001年。
- 城田俊著『日本語の音 音声学と音韻論』、ひつじ書房、2002年。
- 小泉保著『改訂 音声学入門』、大学書林、2003年。
- 米山文明著『声と日本人』、平凡社選書171、1998年。
- 杉晴夫著『人体機能生理学』、南江堂、1985年。
- Eric H. Lenneberg著、佐藤方哉、神尾昭雄訳『言語の生理学的基礎』、大修館書店、1980年。
- Morris Halle, Language and structure (The MIT Press, 1984)
- Peter Ladefoged, Vowels and Consonants (Blackwell Publishers, 2001)